

ワープロ作文ノート

ワープロの漢字変換機能と表計算ソフトの「IF」命令とを併用した、仮名遣い矯正指導の試み（小学五年）

熊谷 哲朗

一 はじめに

昨年、学校にパソコンが五台導入されたのを機に、担当学年の小学校四年生を対象にしてワープロを使った短作文の指導を試みてきた。これまでに四く五人グループのコーポレーションによる「リレー作文」やLANを利用した「メールクイズ」、向井千秋さんの上の句に下の句をつけた「親子短歌教室」等の実践を通してながら、小学校におけるワープロ作文の有効性と問題点について探っている。

四学年次にローマ字学習の発展としてワープロのローマ字入力を感じた子どもたちは漢字変換機能に興味をもち、休み時間にも思い思いの単語を打ち込んで漢字変換をしながら、「（目的の漢字が）出た、出た。」とか、「あれ、どうしても出てこないのかなあ。」などと言いつつ姿が見られる。正しく漢

字変換できない子どもの入力した文字を覗いてみると、どうやら仮名遣いが誤っているために目指す漢字に変換されないケースが多いようである。ちょうど五年一学期の小単元で、「仮名づかいのきまり」（光村）を扱ったのをきっかけに、ワープロの漢字変換機能を利用した仮名遣い矯正用ワークシートの作成を思い立った。

二 仮名遣いについて

子どもたちの仮名表記をみると、一年生から段階的に学習をしてきているはずの仮名遣いが、かなり不正確であるという実態が目につく。特に、拗・長音、促音、撥音の欠落や誤用、「ず」と「づ」、「じ」と「ぢ」、「は」と「わ」の使い分けの誤りなどにおいて著しい傾向を示している。担任も日記・短

作文の添削や漢字の読みのドリルでの批正などを通しながら、仮名遣いに対する意識を高めさせるようにしてはいるが、仮名遣いについて系統立った指導になっていないことと、朱を入れて返された自分の文にさほど関心を示さない（または、書いてしまえば結果は気にしない）という児童の意識がうかがえることから、これまでのところ目立った変化は見られなかった。

（ここで、新旧小学校学習指導要領に示される仮名遣い指導に関する記述（「内容」及び「言語事項」：抜粋）を見てみると、下記のようになっている。

つまり、仮名遣いの基本的な内容については二学年までに一通りの学習を終え、その後は繰り返し学習することによって定着を図るようになっていくことがわかる。

ところが一・二年生の発達段階を考えると、個々の言葉についてはある程度正しい表記を学習することはできても、仮名遣いの規則性を系統立てて理解できるまでには至らず、誤つて身についてしまった仮名遣いがなかなか修正されないまま学年が進んでしまう心配がある。担当学級の実態からも仮名遣いの誤りが目立ち、その都度朱を入れて指導してはいるのだが、低学年で一度身に付いた癖（？）を矯正することは容易ではないことがわかる。その原因の一つとして、自分の文に朱を入れられることは受け身の心理状態であり、自ら求め考えようという過程とは反対方向に位置するため、繰り返しによる指導がなかなか

年 学 6 第	年 学 5 第	年 学 4 第	年 学 3 第	年 学 2 第	年 学 1 第	現行（内容）	（言語事項）	新指導要領
ケ 自分の書いた文章を読み返して効果的な叙述の仕方について工夫すること。	ケ 自分の書いた文章を読み返し叙述の仕方について工夫すること。	ク 自分の書いた文章を読み返して間違いないように正し、分かりやすい文章に直すこと。	キ 自分の書いた文章を読み返して、間違いないように正すこと。	カ 自分の書いた文章を読み返して、間違いないように正そうとする習慣をつけること。	力 自分の書いた文章を読み返す習慣をつけるとともに、間違いないように注意すること。	力 自分の書いた文章を読み返すこと。	長音、拗音、促音、撥音の表記	ウ 表記に関する事項 （ア）長音、拗音、促音、撥音などの表記ができた助詞の「は」、「を」及び「を」を文の中で正しく使うこと。
送り仮名や仮名遣いを正しく	送り仮名や仮名遣いを正しく	送り仮名の活用	送り仮名の活用	他の仮名遣い	を			
イ 表記に関する事項 （ア）送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。	イ 表記に関する事項 （ア）送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。	ウ 表記に関する事項 （ア）送り仮名に注意して書き、また、活用について意識をもつこと。	ウ 表記に関する事項 （ア）送り仮名に注意して書き、また、活用について意識をもつこと。	ウ 表記に関する事項 （ア）送り仮名に注意して書き、また、活用について意識をもつこと。	ウ 表記に関する事項 （ア）送り仮名に注意して書き、また、活用について意識をもつこと。			第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い 2 第2の各学年の内容の「言語事項」については、次のとおり取り扱うものとする。 （一）音声、文字、文法的事項などのうち繰り返し学習させることが必要なものについては、特にそれだけを取り上げて学習させるよう工夫すること。

浸透しないということが考えられる。

以上の理由から、児童自らが進んで考えるときにも、楽しみながら繰り返し学習することによって仮名遣いが定着できるように学習プログラムの必要性を感じた。ところが、市販の教育ソフトを探しても「仮名遣い」の学習にしばつたものはみつからないことと、児童の実態に応じた問題設定をするには、担任による自作が好ましいのではないかという考えから、以下に紹介するような仮名遣い矯正学習用ワークシートを試作した。

三 カルク（表計算ソフト）の「IF」命令を用いた、仮名遣い矯正ワークシートの試作

1 「IF」命令について

表計算ソフトの多くには、演算用の関数（SUMやAVGなど）のほかにマクロ命令と呼ばれ演算を補助するためのプログラムが用意されている。また、表計算ソフトは簡易データベース機能を併せ持つていることが多いので、乱数の発生やソートを行うことも可能である。

特にマクロ命令の一つに「IF」コマンドと呼ばれる命令があり、その働きは、引数で指定した条件の結果によりその後の作業を分岐させるマクロ専用命令である。たとえば参照するセルをセルA1と指定しておき、セルA1に「X」が入力されれば

命令「Y」を実行し、「X」以外の入力があった場合には命令「Z」を実行するといったプログラムを組むことができる。このときセルAに入力可能なものは数値だけではなく、漢字や記号を含めた文字全般について入力が可能となっている。

そこで今回は、ワープロの漢字変換機能と表計算ソフト（カルク）の「IF」命令を併用することにより、子どもが正しい仮名遣いを学習することができるようなワークシートを考案し、実践してみた。実際に使用した表計算ソフトは、鈴木教育ソフトの「ハイパー・キューブ」という統合ソフトであるが、表記の仕方と参照結果の反映は多少異なるものの、他のポピュラーなカルクにも必ず「IF」命令が搭載されていると思われるので流用が可能であろう。

以下、主要な四ソフトについて、セルC1に入力するプログラムを例示する。プログラムの内容は、「セルB1の入力結果を参照し、既に入力されているセルA1と一致した場合にのみ「OK」と表示し、それ以外の入力があった場合にはすべて「NO」と表示せよ。」という命令である。

① ハイパーキューブ（キューブカルク）の場合（実際には、記号や数値部分は半角入力となっている。）

IF (A1=B1, "OK!", "NO!")

※ただし、数値以外の文字に限り、参照セル（B1）が

空白の場合「error」が表示されてしまう。

② Lotus1.2・3の場合

@IF (A1||B1, "OK!", "NO!")

※ただし、数値以外の文字に限り、参照セルが空白の場合「OK!」が表示されてしまう。

③ 三四郎 for Windows の場合

IF (A1||B1, "OK!", "NO!")

※ただし、数値以外の文字に限り、参照セルが空白の場合「NO!」が表示されてしまう。

④ EXCEL の場合

IF (A1||B1, "OK!", "NO!")

※ただし、文字・数字とともに、参照セルが空白のとき「NO!」が表示されてしまう。

2 仮名遣い矯正ワークシートの実際 (ハイパーキユーブ使用)

セルD3:IF (カウント (D3..D3) || 0, "同じ言葉を入力してください")

セルE3:IF (D3||B3, "正解です。次にすすみましょう。", "あれ?もう一度やりなおしてこらん")

※ B列は参照用セル。D列は入力用セル。E列の表示は実

際には隠れており、セルDの入力結果に応じて、どちらかが表示されることになる。

13	※ いいで、その調子。										※ スタート!					※ D列は回答入力用のセル	
											A	B	C	D	E		
	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	今日	同じ言葉を入力してください。	正解です。次に進みましょう。○あれ?				
	水	応答	講演	道徳	貿易	さん	お父さん	お姉さん	お兄さん	お母さん	↓	同じ言葉を入力してください。	正解です。次に進みましょう。○あれ?				
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	同じ言葉を入力してください。	正解です。次に進みましょう。○あれ?				
	同じ言葉を入力してください。	同じ言葉を入力してください。	同じ言葉を入力してください。	同じ言葉を入力してください。	同じ言葉を入力してください。	同じ言葉を入力してください。	同じ言葉を入力してください。	同じ言葉を入力してください。	同じ言葉を入力してください。	同じ言葉を入力してください。	同じ言葉を入力してください。	同じ言葉を入力してください。	正解です。次に進みましょう。○あれ?				
	もう一度やりなおしてこらん	もう一度やりなおしてこらん	もう一度やりなおしてこらん	もう一度やりなおしてこらん	もう一度やりなおしてこらん	もう一度やりなおしてこらん	もう一度やりなおしてこらん	もう一度やりなおしてこらん	もう一度やりなおしてこらん	もう一度やりなおしてこらん	もう一度やりなおしてこらん	もう一度やりなおしてこらん	正解です。次に進みましょう。○あれ?				

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	
(21)	※	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	A
縮みのび	少しむずかしくなるよ	地図	力強	茶筒	産力	鼻血	言う	遠い	大きい	多い	通り	B
↓		↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	C
してください。	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	D
もう一度やりなおしてごらん	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	E

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26		
(31)	※	(30)	(29)	(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	A	
語異同音	なかなかやるね。これはどうだ！	て帰	いち	氣持	たかつ	く近づ	て送	て作	校小	空気	紙	B
↓		↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	C
してください。	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	同じ言葉を入力	D
もう一度やりなおしてごらん	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	正解です。次に進みましょう。○あれ？	E

を立ち上げるたびにアトランダムで問題設定を行うことができ、児童がドリル形式で繰り返し返して学習しても飽きないであろう。また、乱数の代わりにデータベースのソート機能を用いて、条件指定による問題文の並べ替えをするという方法も考えられる。(ただし、表示画面から隠れたセルに読み仮名を入力しておく必要がある。)

② ①と同様に、隠れたセルに読み仮名を入力しておき、回答欄と参照させるようにプログラムしておけば、漢字の読みのドリル学習としての活用も考えられる。この場合も、乱数やソート機能を利用することによって繰り返しが可能になる。

③ ひらがな表記のまがいなおしも、表示画面から隠れたセルにあらかじめ正答を入力しておき、児童の入力用のセルがそこを参照するように指定しておけば、ドリル学習プログラムとしての利用が可能である。また同様に、敬語や係り言葉についての学習用ワークシートとしての応用も可能である。

④ 表示画面から隠れたセルにあらかじめ正答を入力しておき、指定した回数内に正答が入力できなかった場合、特定のキーを押すと正答が表示されるようにプログラムしておけば、児童が自分でまがいなおしをしながら学習を進めることも可能になる。

⑤ ローマ字による単語を示しておき、ローマ字↓かな変換機能に従って児童が同様に入力することによって仮名が表示さ

れる機能を用いた、ローマ字入力練習用ワークシートとしての利用も考えられる。(ただしこの場合も、表示画面から隠れたセルに正答を入れておき、児童の入力セルと参照させるようにプログラムしておく必要がある。)

⑥ お仕着せの高価なCAIソフトではなく、学習者の実態と指導上の必要性に応じて簡単にプログラムが可能であり、制作者のアイディアによって柔軟に構成することができる。

2 問題点

① 上記ワークシートの場合、4〜5人グループで一人ずつ交代で回答するという方法をとり、一人平均10〜12回入力を行い全問クリアするまでに20分弱を要した。パソコンの台数が多ければ、同じ時間に一人あたりが回答できる数も増やすことができる。しかし実際にはローマ字入力の習熟度に個人差があり、問題数が多いと時間を要する児童が出てしまうことも心配される。ひらがな入力や手書き入力、更には音声入力といった方法も検討してみる必要がある。事実、それぞれほぼ実用化の段階にまで達している。

② また、ローマ字の場合には「ぢ」「じ」はともに「zi」(または「ji」)、「つ」「ず」はともに「zu」で表されるほか、「を」は「o」、「くへ」は「e」、「くは」

は「wa」で表されるためにローマ字学習の内容とワープロ入力とが一致しないことがある。同様にローマ字では長音はすべて「へ」の記号で表されるところがワープロ入力とは異なり、これらが学習者の混乱を招く一因にもなっていると考えられる。

③ 今回のように漢字の熟語の読みを入力して漢字変換するという方法をとった場合、児童によつては一字ずつ入力して漢字変換してしまうケースも予想される。たとえば上記の問題の中では「ひがし」と入力して「東」と変換し、「きよう」と入力して「京」と変換してしまう場合などである。対策としては、漢字熟語とともに別のセルに読み仮名を入力させ、隠れたセルにある正答の読み仮名と参照できるようにプログラムしておく方法が考えられる。

④ また③とは逆に、一括変換の場合未習漢字も変換されてしまうことがある。上の例でいうと「のび縮み」「伸」は未習漢字の際に「伸び縮み」と変換してしまい誤答と判断される場合があるので、あらかじめ学習者に理解させておく必要があろう。

五 終わりに

今回は仮名遣いの矯正指導に焦点を当て、児童が繰り返し学

習を通して正しい仮名遣いを身につけることを主たる目的としたワークシート作りを試みた。従つて、表題には「ワープロ作文」とあるが、本稿の実際は作文指導の内容にまでは踏み込んでおらず、CAI的な要素の強い文字表記指導の実践報告であり、羊頭狗肉の誹りを免れないであろう。しかし、担当学級の児童に行った作文に対する意識の調査結果をみると、作文嫌いの理由の中に「口では言えるけど、字で書くのはイヤ。」という表現がある。この子の意識には、「文字を書くのが面倒だ」ということの他に、「正しく書けるか不安だ。間違いを直されるのがイヤだ。」という面もあることが考えられる。つまり、文字表記への抵抗が作文嫌いの一因であるといえるのではないだろうか。それならば、ある程度の語彙も身につけ、基本的な文の組み立て方のおおよそを理解しているであろう小学校五年生のこの時期に系統立てた仮名遣い指導をすることは、子どもの作文に対する抵抗感を和らげるとともに意欲を高める上でも有効であると考え、今回の実践を試みた。肝腎のワープロ作文の実践については、次の機会に譲りたい。

(くまがい てつろう 長野市立川田小学校教諭)